



門15
508
20.
卷

冬のすまひ



春庚子三月二十七日 東都下谷 実あき 徐火 東巣山に及ひ院々多

延焼せし 喜中に我 公の御宿坊頭性院とそぞる
も鳥有アラガル これきと日ミテツキ 六月十四日 令休蒙りて
土木丸車タムカマツル わづを仰アゲル 日ヒドハニ日 俊山スミヤマ 移シフクて
假かる所に住リ 紹シテ いして うつらうてシノ夏
れぐく風すレーレイゆゆゆ

秋夜よ吹くもの音よ秋夜の庭もあらばよ
冬閑ヒマ 遇ウカ!

隱ヒカル 阿閣アケ 命メテ 秋アキ 涼シラ 莖アキ 水ミズ 鍔錦タマヂ 休ヒマ 短

棹長歌カヤヒ

悲遠客ハシモトコト 孤身疑夢ハシモトコト 一ノ波塘

中堂セントラル

東西のきよのすのすの瑠璃尊ルリスン ねル 法華堂ハツカドウ 常行堂ジョウヨウドウ

物巡^{カホ}アリて奇^{ハシ}め也^{ハシ}よ宿^{マサニ}めハ數十町の水面を^カて
荷葉^{カサ}緑^{ミドリ}細^{アキ}一^ヒき^{ハシ}蓮^{ハス}花^{ハスバ}あ白^{ハタチ}とモド^レテ香風^{カヒラ}リ
隔^{ハナ}く蓮花界^{ハスノカイ}にヘ^リト^ハ趣^{ハシ}クリ

蓮風^{ハスノヒラ}送^{ハシル}暑^{ハヤシ}露^{ハス}草^{ハス}浮^{ハス}獨步^{ハス}微吟^{ハス}慰^{ハス}遠遊^{ハス}一王^{ハス}
字無塵^{ハスノシナ}東岳^{ハスノタケ}暮^{ハスノムカ}水光^{ハスノミツカ}山色^{ハスノヤカ}双^{ハス}情^{ハス}珠^{ハス}
日^{ハス}かく瓶^{ハス}立^{ハス}アリ^トとのれ身^{ハス}よし心地^{ハス}りす
音^{ハス}もすよき^{ハス}御^{ハス}鷗^{ハスノウタカ}の^{ハス}御^{ハス}吹^{ハス}てゆく秋^{ハス}の袖^{ハス}る
市^{ハス}莫^{ハス}有^{ハス}歸宿^{ハス}一文^{ハス}やう^{ハス}してゆく^{ハス}
たうの尽^{ハス}むき^{ハス}すれぬ^{ハス}處^{ハス}もと^{ハス}の^{ハス}是^{ハス}の^{ハス}株^{ハス}アリ^{ハス}と^{ハス}
水邊^{ハス}より月^{ハス}如^{ハス}見^{ハス}ゆく^{ハス}

丁江^{ハシ}秋色^{ハシ}不^{ハシ}負^{ハシ}、滿眼^{ハシ}金波^{ハシ}入^{ハシ}望^{ハシ}新爽氣^{ハシ}
飄然^{ハシ}芦^{ハシ}荻^{ハシ}露^{ハシ}天^{ハシ}心^{ハシ}水^{ハシ}本^{ハシ}無^{ハシ}塵^{ハシ}

け山^{ハシ}に^{ハシ}あ^{ハシ}つて^{ハシ}来^{ハシ}れる^{ハシ}、^{奥底^{ハシ}}とされ^{ハシ}き^{ハシ}との^{ハシ}先^{ハシ}

れ^{ハシ}そ^{ハシ}き^{ハシ}け^{ハシ}り^{ハシ}

音^{ハシ}林^{ハシ}風^{ハシ}れ^{ハシ}立^{ハシ}も^{ハシ}そ^{ハシ}消^{ハシ}去^{ハシ}利^{ハシ}れ^{ハシ}て^{ハシ}こ^{ハシ}れ^{ハシ}る^{ハシ}の^{ハシ}お^{ハシ}さ^{ハシ}き^{ハシ}
ト^{ハシ}ゆ^{ハシ}き^{ハシ}こ^{ハシ}り^{ハシ}ほ^{ハシ}し^{ハシ}り^{ハシ}れ^{ハシ}も^{ハシ}た^{ハシ}す^{ハシ}か^{ハシ}ば^{ハシ}た^{ハシ}
り^{ハシ}つ^{ハシ}て^{ハシ}

一^{ハシ}危^{ハシ}ふ^{ハシ}木^{ハシ}の^{ハシ}れ^{ハシ}下^{ハシ}て^{ハシ}お^{ハシ}き^{ハシ}え^{ハシ}て^{ハシ}る^{ハシ}の^{ハシ}じ^{ハシ}承^{ハシ}の^{ハシ}一^{ハシ}
慈惠慈眼兩大师の真像此山^{ハシ}三十七院^{ハシ}一月^{ハシ}づ^{ハシ}
執事^{ハシ}し^{ハシ}す^{ハシ}し^{ハシ}文^{ハシ}月^{ハシ}ハ凌雲院^{ハシ}よ^{ハシ}延座^{ハシ}り^{ハシ}し
院主探題前^{ハシ}大僧正^{ハシ}ハ引^{ハシ}家^{ハシ}翠^{ハシ}川^{ハシ}上^{ハシ}一^{ハシ}山^{ハシ}の^{ハシ}学^{ハシ}頭^{ハシ}
に^{ハシ}ね^{ハシ}一^{ハシ}終^{ハシ}マ^{ハシ}ト^{ハシ}は^{ハシ}り^{ハシ}と^{ハシ}れ^{ハシ}一^{ハシ}き^{ハシ}縁^{ハシ}に^{ハシ}え^{ハシ}
仰^{ハシ}三^{ハシ}月^{ハシ}ハ慈惠の御^{ハシ}月^{ハシ}忌^{ハシ}す^{ハシ}御^{ハシ}帳^{ハシ}開^{ハシ}き^{ハシ}ま^{ハシ}
せ^{ハシ}く^{ハシ}え^{ハシ}や^{ハシ}せ^{ハシ}ス^{ハシ}、^{ハシ}一^{ハシ}品^{ハシ}の^{ハシ}宮^{ハシ}と^{ハシ}御^{ハシ}參^{ハシ}

あくま 根本華峯の二天師ハ子もせば大師
さはをよよく知りまつせて 都鄙參詣する
者多ううぐふ本地十方慈父れ観自在大薩埵にい
まうううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう
願す方に響の如く應あうすやうこありるるれ
はとてとうてもゆうれんなく 水き開路が照
にまくと祈已すりて 楊巖の由ニ我ガ觀聽圓明故觀
音名徧二十方界一能以眼根作耳根佛事一故名觀世
音自立無礙トシ云文と異ひて

院月ばかりあるまきしむすはりぬ底の夕月
七夕まつゆのすびときほのアレシホシヒマテアム
川とせ下に間ぢうにかじくれお私モテ

新此と早食ひとすら川いふはくまほのゆる
丁声江笛晚池館採蓮花水勤魚迷佳林空

鳥有家素琴和月冷銀者含秋斜脱酒夙煙

外牢雲將上楨

提列長柄の橋れ木うれ 故吾亞相歎光父卿刻記
くくる地藏尊を奉さぬううすうして度東行にと
身にうううううううううううううううううううううう
れて此山にゑーーと住むキとほうけいび
ねば、彼大士の像孙院主にまつせ承く
南院に安置したとして多ナムよ絶殊。内
ゆくば生前の喜且ハ先時のくもと外我後

のせと校拔たり少て

なに賤薄用をうなきりあまつてはあ船長
靈祭ら比ひよてと被高くみせのむづ
びづるをもとへるれ客船で（あくあす）
えくとこえくとぞしてそよーおれ様の
風よ御り忍の圓にしてそよーおれ様の
そよのトノルとれむけれあくれしゆらと空の
そよ良鐘梵の声に心とすとそよーやかくても
ちよよひくとそよくう能（のう）せ

月齋述懷と

護玉院の常不退轉念仏所にてある人これ
爲に称名して香す歎仰るとて

脱無邊苦海 頃ハ天華光落々大千界

金風草露涼

さへだ小高き神の夕まれはしおつむよア月
木照院塵 一品の宮代御墓所ねー奉るを高く久遠壽院
准后代様に参立て彼康寧の御時まくまく
せてほの道弟りーすがれ秋といふと
りてくれども

幾年休まひ秋れどもと歩き風の衰れ下落
す日よ、主神居立いそましくてりり
ふき作ことれどりけりとれり日一日

常乐院の百方返會エコウ
ひよりす後川のあれ秋れきて左シタぬえれ月とすとす
ククリモとひのねトれあらよマセ左シタの月ツキ
文殊の像を安置する
十六日大殊樓スルウし登る遠きかみ日ヒとさやう雪ヤハラギ
海門秋霄ハマツキ松声靜閣上風旋ハマツキ旭日迎歎ハマツキ

掌々新眼界凌霄俯視碧瑣ハマツキ

人のクニヤつります

おみ空アメ相の空アメをめゆるよ地チ乃處ノカニをこらク
金剛女房花キン刚ナメハナと人のとすしはどい人ヒトシハシナフの降りオカシ

一すれじからひそハシナフ

二年四月は天台の御忌日より三昧堂にて懺法會カミツ堂
行ハシナフまれ六根の罪ヨミと清ハラハラして懺悔カミツの
あらび

またあととくに高野山と申す伊豆の里イズノシタのまん

大佛殿のうち懸願金剛の鑄像カタチに立客シテ迎ハシナフ
きりうらしあるお会オカミ六所に地藏尊の像ジツ納ハシナフまで
詩人に縁 缘縁 缘し取至今年九十歳トクヤドク記メモ
弥陀の名号と教面に書き地藏尊の利益ヨリ記メモ
人ヒトおなじくたのうととほのうよもよもんモモ陀タ仏

を志シテの竹チクうりしうきつ

そぞぞヨモヨモたれぬマモリよすばの街シタに

ナキ堂ナキ堂ハ 献廟ケンムイの舎シタにて藝候アーヒの立タチまタマし

平盛久代受若の御誓文より白刃歎て不患儀の灵瑞
すりきる尊像にあり。縁記也と曰しけ堂にて

おもてたてて誓札持てうづやくと人云々すし
とよしと二年の故に以て六月八日ハ盛久令

复州の被れ衣冠そのまへて下り衣を脱ふし

東叡山學頭凌雲院前大僧正實觀高仙波の星野山竹は
山に生せり星降の化りと當山無量壽寺喜多院兼帶るゝと

徳寺ハ慈覓大師墓松開き許陀の像と調刻して安置

一たまら是地に幕下朱章の地セ而石碑領正

方院園東設所れ薩一とや河越と安下ちくにし
野の里ほどをうびりとづけ、所とさゆさてと

凌雲の亭より南東を向て望火ハ東都半ハ眼下に
足らず上総下総も房等する。見ゆる御角川

ま川ち山ぬく月の夜いとく興あし

あれと又かくねびじ朝て誓札山の月やすすす
月比常行堂。重音の事はも令持と奉りて

れをめほし約もと同孤ありては堂は我。前品

家敬公寛永四年丁卯九月に達^{シヤ}セナシ^{シキ}奉行女郎勅^{サツ}本尊

は紅頬梨色の阿弥陀如來^{金也}觀音二菩薩^{良長}三

三^{アマ}室^{アマ}此妻^{アマ}に摩多羅神を祀^ル念佛三昧
の守護神とて鳴呼法華妙詔に如來親しく往生と
記華嚴頤教普賢解陳^{シマ}執持名号^{シテ}功德
如來一代の會^{アマ}とて称讚^{シテ}十方の種覺と
かく證誠^{シテ}たまふ謂の思葷末法の羸弱者と云

とと称記大願業力に依てひやすく無為の報生じ生す
る事なきうれのまでありざんそはじ王三昧海に入
て在縲の罪垢と滌き塵累の清淨が得て妄養の
勝蓮花と同き親と如まれ先量えし見現前は菩提
乃記を授けりて化身无数百俱胝智力廣大にして
一方ヲ偏一ノ善く一切衆生界に利度せし
亦紫一ノするもやくそる像がね
室号と唱へまにて香たてまつる

61 山巍然獨生法堂秋月面光円滿玉樓易姓西方
十万億一声一念豈難修
は堂にて毎月十四日毘茶羅供々人修では是と
亦華峯大师の遺風也

避暑忍池

蓮風送暑露華浮獨步微吟慰遠遊玉
字無塵東岳晚水光山色双清殊

和

古丘池遙自蓮路緩歩微吟半日遊眼
底翠巒逕暑處林頭風靜寺門秋
らしくてゆくと岸のゆくらんと後頬胡にあら
丈夫の歌ひ人の人のつゝいとそよせく
きうしくや謂の歌よいていと小き声戸ハ多の
びくびくおひはりくと多く

音もくのあれねじタリきまゆの声
僧り念佛往生の事おじまくゆりし因空云轉

鑑十四年五月二日

由比浦の漁夫無病して死す往生の瑞想

もとて諸人奉て結縁を端座含掌——て聊アカ勤摶化
と記せり是如何う念仏者シテリん吉水大师西紀
八日漁人ハ勸て往生せしめ致ひシテ也されば
大师の傳スルに法中よりハ慈日良快顕真明遍
等ハる傍智誠シテ蓮生教阿等ハ不二字の僧幾シテ百々
共に西方に往生シテ且上三代の至尊后妃竹園三公
九卿と始武家野人愚丈愚婦及び強盜獵者淫房
の婦女れ類シテ念佛往生の教化漏シテ是寔シテ如末
大悲の誓願機シテ十方善惡の衆生至心に
信樂シテ役園に生せんシテ永ヒカル草直に念佛シテ
ハ詣シテト人々ハ之シテの因ハアテニ字
無今ハの機ハ他刀の出離シテ外ハて路シテキ半ハ身ハ死シテ
也シテある上人ハ勸シメられシテこそハ死シテト
○不然禪尼ハ東福院の女房シテレ女院シテれシテたまひ
くは降瓊シテ諸方の禪師ハ參シメりてシテ明眼
の危化シテ出家の初シテちのシテトシテにシテり
いて自面シテと燎シテ其頃

首遊宮裏燒簾廬シテ入禪林燎西皮四席流行亦此
不知誰是箇中移

生シテとすやくおシテほシテ游シテ薪シテとシテばシテセシテ
京都ハ下シテて縫縫多シテり晚シテ鎌倉シテつらシテれ
トシテりシテ月シテつきシテ一毛の和歌シテ人にシテく
られシテ其シテ冊シテもシテ得シテ——昔日波禪尼シテ

見一時同云何是祖師禪尼拂一拂云不傳敢問不傳傳厄云林風浪馬蹄絳云一江秋色画難成云歸也二十餘年夢トありれま人此卷か又云いもとの内の心地も先時の記念たり

主君びとひがたますとせりゆれのゆき
彼毛何へケ若つてむすくさにのうぢ

毛セ

○初秋の頃もあらへの亭子

殊無事相の一葉は高とウタエよ被の高とみざる、
初秋や月の出と山川よすドタとす相のつまると
或人寓舍代とすひこのすまうとすとすとすとすと
大門ねうじて近づいて御門をめぐらぬるをばすと
ノリ得てとまね高にしきとあきと
渴てとまね高にしきとあきと馬の高眠す
北へつゞれの孫をとんくわく馬の高眠すと
东南海へれて遠帆のかいがりて食肉被と
と乞ひて被衣の衣高くとこととととととととと
乞りうすすきいとんじれりと共によつてととと
新すとととせむとととととととととととととと
月のととあすとととととととととととととと

後京京音法利平氣別て表東旅度日もん
新知恩寺の鐘りつときニ仰る入部又金鼓すと
くく切きて處の役と川すととしれー情隨意
丈墓に開き龍神に縁と結ばれ一年なり

おとゆゑ

講殿秋用一葉風寒泉脉々酒塵
中金鐘呼去武陵月捧出^ス竜珠光
玲瓏

湯嶋天滿宮の内にて皇子の藏王權現の像同帳のはじ
人の語り曰是吉殿子守勝年三所^{ムカニ}御神^{聖使大主}御作
もすてはる^リみりゆき冬ハ當圓月もゆる
人にてよみてを

ひぬれのひのくせと不^シ禁^シいれとなす
はあさに妻^{ミタニ}明神^{ミツマタ}と小祠^{ヒサ}いられる神代^{シモト}の事
まや柳の井^{アシ}と前も竹^{シテ}葉篠^{イハシ}の里^{ミタニ}の事
後のむかし山^{ヤマ}と名^{ナメ}すを、^{シテ}そうち山角川
歌にゆきけら名前にて

或人云う^{シテ}此の國と^{シテ}よめの隣^{シテ}也と不^シ忍^シの池^{シテ}
ソトヨコ^{シテ}よこみにと愁れにと^{シテ}よきと依^{シテ}く
ひかく^{シテ}せても^{シテ}恐と^{シテ}山城國^{シケイ}郡^{シキ}山^{ヤマ}と^{シテ}威^{アサハ}栗^{アサハ}
の村^{シテ}今^{シテ}の里俗^{シテ}私^{シテ}の處^{シテ}呼^{シテ}ト^{シテ}四日^{シテ}の説^{シテ}
東並^{シテ}の^{シテ}夜^{シテ}の^{シテ}度^{シテ}も^{シテ}八月^{シテ}より^{シテ}を
八月の夕^{シテ}を月^{シテ}と^{シテ}毎夜^{シテ}も^{シテ}次^{シテ}に^{シテ}新^{シテ}を^{シテ}成^{シテ}ゆ
ゆもあり^{シテ}よ面^{シテ}一

たの夜に月がうち^{シテ}前^{シテ}よも^{シテ}ひしの又^{シテ}ゆくや^{シテ}の月^{シテ}

約乳山^{シテ}は^{シテ}國^{シテ}のを

合^{シテ}予れ^{シテ}の秋のそ^{シテ}もに^{シテ}此の又^{シテ}ゆくや^{シテ}の月^{シテ}
久^{シテ}様^{シテ}往^{シテ}うす^{シテ}すご^{シテ}も^{シテ}のれ^{シテ}の^{シテ}ゆくを^{シテ}

す處ひづれ秋の夕や漫遊のすま川ゑ月やすらうひ
白川を東の方へちり

お約がまよきあれれれれれれれれれれれれ

十三月の夜はうといまもきてそとすもそれで松
落して風よ一女の様よくも亨そて物に連覧
月とけむむむむむむむむむむむむむむむむ
ソモモモモモモモモモモモモモモモモ
ももももももももももももももももももももも
ももももももももももももももももももももも

の秋の夕や漫遊のすま川ゑ月やすらうひ

おもじのすまタ（或僧のよし）あ

十四月の夜は漫遊のすま川ゑ月やすらうひ

もももももももももももももももももももも

ナ有立復て月とくさざりとくとくとくとくとく

こあをるに足えもももももももももももも

ほふせ（詞）

風搖白露せ孤枕（津ハ）座オニク文情可

清武後ニ五月不省杜新一年明

早春がこハルとざりれ林のよしりハと詠セ

とゆひひひひひひ

房ぞう和いたけとすと日氣のぬ穂のすはせ

十六夜而やうてれ見えそろそろと立待の音色

山の夜も月も夜も月も夜も月も夜も月も
空てすまきとあやれさーおーおーおーおー
うれー東のうきりの山の月とく寂むさし
月の御^{アマ}うへむらくはやもれ圓^{カク}うへ
すくしけれん花^{ハナ}ーゆ

絶育されさるやれも^{シテ}神の月も^{シテ}
旅侍のゆゑ^{アケ}まの庵^{アマ}とやくはの
いれまれば

今^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
ぬの月^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
といどあや^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
ゆくもう^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
ひりくとぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
おえりとぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}

ぬすきのね^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
ありけ^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
山の月とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
一音^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}

音^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
旅^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
登^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}
涼^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}

冥觀

庵^{アマ}とぞうふい^{アマ}とぞうふい^{アマ}

燈下台家の事は少くいひせば少く黒郊とソラト
後世に至りて山外れ説とのもれてあひて天台の四
とすれども我國中古の記述俗に近くなむ
をやして其實とソラモニシテざるも
ある但し華峯惠心の後眼ある人も多く皆
ノミ智礼智旭^{ナツク}其德其行甚高今の人德
行私すれ文辭に駭き累と好ミ奇才術^{テラ}ひ善提心れ
きこといもくふれ或ハ教觀の旨と外い
ひくす一絆の徳にはうれしもありぬ邪解も尊
て謗罪のとくまきもあるかくさることなむ
此師ハ一山れ學頭にて智行^{チキ}は知識あり
いづれも急かずありとくわく師にありとくわく
立入りぬ道とと向ひむるうへりうれしき強
孤こり六字名号とうきてれりうらめ事に
くみてす津流や玉川の水よきとすり月影
文殊樓の西坂ニシザカの下に宍神^{アツカミ}祠あり鳥居に忍岡福
荷と榜す此より八幡大廟義家奥列下向の時達
りて後に賴朝卿御矣ありとくえ古ヒテ奥列の
通路れマトトクやいと景ゆき地之神も亦灵験いち
トトクナサすとくん云延喜神名式に宍澤大神社
録也義正卿走さ
堺社今之山王地よりし聖堂^{セイドウ}公義正卿走さ
せてまへば天神の北の方をも元祿三庚午昌
平坂一聖堂と後タリ一時天神ハ黒門の前

移りまつせ——十年元月災セト後
今れ茶屋町に移リ立^ツ_{立條天神}二座^{スカツ}と祀る別當ハ代々
連歌^{ソノガシ}学びて前^{マサニ}て柳^{タケ}營の御會すと云ふのづ
トモクシ

今清水寺の地石堂あり一所也

當山ハ^{シテ}藤堂家別業ルアリ其先高の杳火の
場と建寒松院と号ス 大猷公實永寺御處立ノ
時のみ山に東照宮と藤堂家を建られ寒松院^ハ
以て別當トセズ^ト然^{ナシ}れハ寒松院ハ根木代仙院^ハ
トモクシ

湯窓^{ヨシマ}の南に妻戀^{ツヅキ}明神^{ミコト}小祠あり^ト稻荷^{イシロ}トウシ藤別當
實盛^{サチモリ}住所永井の庄也^{今長江ト}實盛^{サチモリ}葉柴^{ハシバ}宗仙寺
に立リ

所の者妻戀の神と實盛^{サチモリ}生ル處^トトメハ此^ハ實盛^{サチモリ}
越前^{カフジ}生産也^{或人云妻戀明神ハ日本武尊の靈^{ミツコトノシタニ}是第撫養^{ヒヤウ}ト管^{スル}也}

乙春^{享保五}庚子^ト朝廷不諱の御事^{ハシナリ}故御會始シム

七月廿三日 内^{ナタ}の御會始シム

緑竹年久

汗製

臺^{タケ}原^{ハラ}綠竹^{タケ}ワセ^ストウシ^スヌホ^スホ^スアシ^スシ

公卿^{ハシナリ}歌^{ハシナリ}シテ^ストウシ^スヌホ^スアシ^スシ

中院^{ハシナリ}通^ス財^{ハシナリ}卿^{ハシナリ}

言^{ハシナリ}シテ^ストウシ^スヌホ^スアシ^スシ

かみ三十^{ハシナリ}年^{ハシナリ}をぬ^{ハシナリ}是行^{ハシナリ}れも代^{ハシナリ}ハ秀^{ハシナリ}代^{ハシナリ}の^{ハシナリ}ト

實陰卿

日一十九日 院にて詩歌合舞ありしとき
させり

勸学院の了翁僧都錦巻賣茶ハ樟に参じ大光普照
國師_{和尚}慧元_{隱元}此門人より忍園の池中辨天の場にて勸学院を
作_レて經藏を建_レシ後今れ地に近_レす_{宮の方}高泉
禪師の碑銘と書_カてこし置_カレシ後僧都諸列の梵
刹に一切經を奉納凡て二十一藏と_ニ實_ニ結縁の有_リ
ぬ事_ニと_ニ後_ニの忌_月今勸学院りて_ニ予_ニ説所_レして
毎_ニの請仰_ル一山の学寮_ニ用_カれ_ク其_ノ德仰ぐ_ル
院内の本尊、唐仏也秋迎來也

今_ニは_ハ探_ハ思前大僧正實觀_ニ寄_シ番頭_ニ置_カて_ス學

東岳に雨伴聴て

山廻日沈陰又晴無論旅工_ニ叫雲煙壺
中酒_テ對燈睡一下枕_ニ秋風威雨声ト

八月廿七日初丁_ニ身_ヲあらは_ル

或_ニ寫_ム音_ヲ人_ノよ_シた_テ聞_ク丁_ニの_一月
七月の初砧_レれ聲_ヲと聞_クとゆふよ_リ一月_ニ
たり底_ニと多_シの是_ノ村_ヲさき因_ニの_ニ重_マれ衣_ヲうそ_ト
妙_ニ上人詠_{ハシ}詩_ヲ和_ス

直節虛心不_レ愛_シ行_{ハシ}七賢林下_ニ宣_セ途_ニ秋風

掃_レ月_ニ玄丘竹夢玉玲瓏恍耳娛

重陽雨晴_テ秋色清_{キヨ}一青坊_一遠_{カタマリ}す

消索_ハ江村細雨_ニ距_シ孤吟_信歩獨_{ハシ}偷_{ハシ}同_シ魚

浮幽沼山攜影丁歛長空雲度閑茅舍
雨晴蒲席廣茗烟風去竹炉閒白芦紅

蓼幾秋色清醸使人忘老顏

この棲も秋す玄の声へたりに葉ゆゑを
わかれ立山僧都と伴ひあらへ山すうち
かくびゆき——佐原口早

品物影衰秋色分懲夙孤丁和鐘圓圭用
已極山林裏獨歎世變對白雲

とよこ下ほとん

薄霧冥寒山不分古林漠々疎鐘圓菊前

衰鬚與霜白一一片般心日暮雲

向國是し古いしむ小野照崎明神

御

天祠ありし台德

山嶺照院善養寺ハ甚、併僧以

と根本三目一

逐て善養寺ハ

一

寛永中初

と坂本三目一逐て善養寺ハ

一

寛永中初

うつる。此寺に初き小石塔あり。小町塚と
呼小野寔清の名に取てかゝとけられ西の岡よ

船はねき

松みて老樹

元禄十一年九月十六日燒

さとも

小野社ハ墓の祠よりして毎年九月十九日祭あり

迎え年或臺上巣下向の時所をさして尋すよ

たまひしてじ墓の本も人多知れると神像

東帝の御影ト武藏の横山黨、小野姓也。これ其祖廟

あり延喜の神名式に小野神社と號す也

首は山海今一又前田川大に立クれ——舟

川の称ゆ

福壽院の境内に龜山と呼ぶ丘あり其にし印し名
の所河内朝臣とめめがらとて惣門前、川常樂院ハ念仏の
道場にてせよ六角と呼む。豊嶋た生川廻
某女の為に武藏野に六所の堂を造り阿彌陀佛と安
置せし。せん若の邊より本としゆせの如事
オトコ。龜井下れ如来と絆とすニ季ハ彼岸
會盒十夜等床下の胃多大く巡走す。

木一軒より六体紙作成す。

九月十三夜、夜半して月出はる。因とん文殊
忍の思れすまかとしまはる。因とん文殊
接せりて、あそひ月見る。竹
うさぎきて松とす。是れ景氣又高きる。神の如き
年よ三といふ。すゑん車馬とおもひゆす。一日も
或へ

ウラモトをかへりきりを前めせよの日れまよ。
ときこへて、こりあられとそく、あくびやかに聲を震
ひあすととゆく言のこゑをきかれん。とす
株の半の月につねを云ひて、とす。あそとす。音
書れタゞいとおづけく。是の日て月と海
絶り。もすとせく音川うき立す。とす。山
の鷗もづくもくとさー。わらすぬひえし
かく。寒きよ。せば秋のすきとこく。とす。
すいりん又仰もう。とす。

果とれ。尾張が高橋をひき。秋のひき。地

九月十五日

ノハ袖田の祭を終て般の都を出立るをさ
こえりて一夕つゝ新章もす、御 やうのる
けりとどもひしめくは社ハ神功皇后より
まことる年將にすやしけ藤孝卿下室園主
ゆゑと舉せられにあむくろじうた威儀の東
のすまを宣と書ひます。御内へゆく御うちな
トリヨミの明神よりして信ひてはとくらじゆ
玄春 朝天不譯の節半にて年母 柳堂より
いへりせくらじく 初使とやうじあ年ぬあをし
ナリモ城ナニ日饗膳候未ナリ日ひ延長
堂上家よりひそかにアキラキと並観とソビトメす
田舎ひらるすゞ、吾のうへ人いふアキラキ
カクシ照像の明神家の日九月
ハセキ清都マキダ おととまくひめのあにあへやなきり
常行之麻堂御冠の跡院す、寛永御建立の始も
すまくちれト一旦 宮の御協是ヤ 以
前には法性御御也れ波、尊像と近ト安置せ
らる大明院宮 今め紅頬梨色のう波浦ま寺傳承
ノテ莫めまいセー 宏朝比徳同身の尊像
もてりよりうくるひな御室尊達の歴相
もよみて

○光明天皇帝歿ス後自氏を云々とくどくする時

○歌のよみがねとさへもあらずに、夜のことを忘れていた
月、金持ともども、うらやましく、又は、上の匂いをひいて、下の匂
とくふ等、つるはれのまこと、万葉集よどぎくともある
是也、といひゆ。

○清淨華院の阿夫人、徳宗上太陽大臣源信宗也。父、武田定
義守時、綱也。山江守朝内のか、龜山院。文永六年、
生れ。元治、建治二年十月、元服加冠。北條伊豆甲斐後河
井、龜等の室と結婚。平尾也。大膳宣氏、至るをえ。應二年
十二月、家康高麗にて。元德二年十一月九日化す。子、伊藤有政
元に、新千歳集の傳も。又一説、文永二年に生れ。弘安
十年、あ歿。貞和元年六月二日、死の事と云ひ。已後、西

は六月一日以迄、日一、せきとて

○承応院、五觀山に、わ寫代景描る屏風浮世絵。又、
寶、八十鳴のれど、くろこと目を、ゆるく、算と、燈籠の
社いと、神、さびる。

○白川の園のわのむすび、下塙に、見え、ぢれ、ひぬと、足
八幡大師東征の日、ひづて、りぞれ。琵琶今古野ノ
金鑽寺に在り我か、故公これと摸モ。御木ト先に、ま
て顯性院にとどめさせ給ひ。

○月のゆく、之時堂に、乞佛しけるに紀研石の勸
學、乞れ。序に、念極樂之禪。一夜山月正圓。しりく
とすいりく、れりく。

春もう向の暮れ秋風より月高きるやのことをよ
青鼠袖ひくとて 銀羽眼静け一鳴喧々私像に對す
とと大賓に接へて恭謹ゆゑうが如く仰げたま
經法改字するを賄利と來られ勤勤に乞すから擇
は慟懼せずして我ハ顔うろとうう面をいふ
されば鴨長明云發心男女にも勧めして命はすて勝他名
聞の處に肝膽とくとく折りもへあ代えと鐵壁か
すや妻子ありゆのぞとゆきばあとゆくと
立そら中うきて片時もすまゆる明るのうそ
筋うそとぬたうていつんじれされば貪欲勝
他の切うる身力がそれのつゝりとやう主と
とあくまで身とほづれも脇もすまゆる身を
すまびにへくとりうれども身
筋うるうとてアヒ此度子江城西霞司谷日蓮院の
僧一婦人が呑によそひい病中れ欲と憲にせし
詔める男彼がやうとうとひ知りうとうけざし
うれうとしけひうすとて之をて身よくと身
ねばスに夢もあれとゆく波男波つゝくやはれ
自殺すとひくひくとて其男波殺すと波つゝくや
とくとくするほどにぐれくれらわくとく
新紋金十文とん等ひすとくとくとく

やうやうのうへ船に舡をかけまわるまわる
島主御 横櫛よこざてをば船やうれ舟あきよお
してさうりづくとみはもまととのうへ
うへて 霧物の寛疏とくせん車えんせんがを
きそくやぐて 便訓に詫うれハ傍くとやもれ
そくとて 禁獄セラ。向うへ刑ヨリとれつ
さとおのよし利のまみのトシテ、うぬぬぬき
駕トドキ又用ドヒ色ばひくとくがわうもすと
なうも男らと わへてとゆりうりもよ
といふてひかれてひづすひあひすあにうてま
わゆゆうくはれの中だらまのひすれのを
てひくういうえーときとく日えどーんを
ルねば死ふくろけひきとてうへという車と
ううじーしとくに死ふる不あひひづよ
やぞれひいづきものまは神ととしれそく
えてとくうくの姫にひきれむよまたかよ
男にひきせん車を男をひき腰で尼も行
うちに向うへりんが御にうきとひすとさあひそ
うへりんがのうへばりうきよに事あくこれ
よまうせとやいとしもすくひて危ふるの躰れを
危ががくひてひづくひづく人のじもとを
うへくうへくとせんせん男にあくを

りうづまようんとくうすりもはぐれを
とまつてゆきとまつてゆの尼が縛るて落門
御よろことくゆがふらとくき声ひくほんじたら
もくす二日め來まハ音をしたく絶まうと
怪き鳥の鳴れさがれくしゆがえぞ聲に声ゆ
はちくさくりればうとの元と御れ男セモさきの
羅とわくド今ハヤリ守くとくちちもあひ
すみれバ聞くらとく羽アシテ強はどきわ
一ノ月にも聲とぬくもとくめう
えくよな人へくわくれど見が毛筆を
ストとおれ云うる者自のりくとも歎美歌
危がれ聲の母ゆの想キロモトとく
うきよくも聲とくよひいふ含いりてと
うりやくめセツガ音自比くわくらにうみ
死よしひきるとうん光たも詠ぬけたもく
うつうくはくとくよは死ニタキテ行をうゆく
きくと傳人後とくいくあく
きく一鳥を初繫念生却くとくふも
ふもととて三塗の波流に入りたての處にあれえ
多御汝聲ハすりゆくあよをあれ又ハ射く
まされてうしる難をとせしも額とめりしる
くわくれとあ禍葉の脣形縁にそりとまし

トシモウニテ
壹殺立の四重と抱一ノヘ
既利御に沉ミカヘ二十一億云
十歳の音ノリモと多タニ
月連向
火や花火も身日
八重比波羅夷と如何がせん我等ナ禪の能思と
ソモ幸にて六人超セの物事よりアソイで九呂津美
望城行進終時徒行坐金蓮の本意ハテグラニヒ
宣ミテ一セ也んや然モアリシルハ願行の事
ヨリシムニ心の用とれり御子をゆるキドモ
テテハリモ善事皆善知識
又或諱死の備出せの爲に敷千金バ懷シ
上宮セ
白浪錦林比恐レとツ
帰モ上る路にレキシテレキシテ
アリのリカ放ニシケレ夷シテ
西園裏の處
懷金と手袋に入れてまつば懸シヒシテ渡士
キテリヤ逆向する勢田の松東とてあくモシ
行キリモや逆向する勢田の松東とてあくモシ
勢田が渡士みて欲心ありテ其傍の橋をつされ
テ白敷色タリにて毛脩繫テ至れり
せんレ、ありればおづき言もれど一に備えアシ出
せそりテ、うにせ座に更ア人食のみに命とし
めんセヤ
本ニシイシシテもく足下と対
カクテ中央に渡りシレ一ゲジシ中央ニシキ

もヨリヤハ 故やそ岸に立キムアレドアハ出セモ
アリシテスミシモシタマシヤアフリル人ニシモシタ
タリ泡ヨシタクルノハカラシタクルシヨハセ
サリヒトシモアレル初ルヒタツシヨシシタ
ツビリの 腹縫ジツイミ と故てこれモモリシトトヨ
足下ル所立辟シカヒ 今シトトレソシテモリ罪業
始哉トキナムシトカタリテアリ化ト恨ハラス ヤアリ
ナハ皆痛スリギキ 因の驚ゴラカ ハモリシトモ御
ヨハナト驚アラシ トシヒトヤ敷アス セヨウリヤン
驚ハラス てこそよりハシトアリハいトヨアスモ詮ハシ
ト神カミ ヨナズダラニヒシモ トモトモ身カラ ヲト男
ハシトモ身カラ ワニカメシテ驚ハラス トトラモ一筆も済
テアリアヒタメハシトアリハシトアリハシト
ハラストトハシトアリハシトアリハシトアリ
驚ハラス トモ蓮ハラス 社シラ トモシモハシトアリ
トモトモ身カラ ワニハシトアリハシトアリハシトアリ
長ハラス 神カミ にて堅固ハラス トシタマシトハシト
トモトモ身カラ ワニハシトアリハシトアリハシトアリ
カヌモトシトモ密提ハシタ の通ハラス に入ハラス モハシトアリ
流ハラス エル一念の忍ハラス トハシトアリハシトアリ
トモトモ身カラ ワニハシトアリハシトアリハシトアリ
カヌモトシトモ密提ハシタ の通ハラス に入ハラス モハシトアリ
くさくさとニ名ハシトアリハシトアリハシトアリ

○ 蓮華二昧經の二千である信心城の文と因經の義軌によ
衆宝清淨蓮華臺上蓮華眼仏號加趺坐ハサ 阿難陀仏

仁和寺の清還僧郁金界三十で尊號以て富麻曼茶
羅中臺比三十七尊と一一名位印記以作已一毫の
抄也と著され」と大師室の上乘院代く相傳多し
西山善惠上人の孫房證公修て長樂寺の隆寛律
師の門人阿日師に授けられて承たるゝ而家承四年夏譽大僧正
譽上人傳(秘)て承たるゝ而家承四年夏譽大僧正
西阿上人に授けられ(東都西山称往)五十年後富麻
綱目秘次釤と逐つて七箇の口次ゆれらる今現は
在より講說廢せ(院鑿一百万人に結縁)

○台宗の飯命房(正如今身)九小路家にて
一品禪尼(桂昌)の仰(レシテド)御(モリ)ひよき(モリ)本の西教寺に住
セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
に念仏してある(モリ)因東を(モリ)舍(モリ)て萬
あり(モリ)而(モリ)御(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
ハ(モリ)ド(モリ)御(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
諱(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
ふいあ(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
福(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
留(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
も(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)
あ(モリ)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)セ(ル)

身と齋約しとぞにあらずまよちを
住おつしもうと重き事へひきてとゆめのを
ゆすら生前に尼公にひよりせり又
うぎれ第恩れもひま、附いとゆてよ
すとこそ旅宿に歸りてアセス後半の
あひとひつゝと云ひてゆふせられ
君も利益に心ゆきとさはと感ぜるも
そなへ岩倉山の奥よ岡地と深く之丈
の庵ひき緑び内よせに用ひ、御殿やととす
トサ一戸すくて飯をしゆす粥もとゆぬ
軒に觸體一戸ひて常に無常觀と云ふ
テと聞て聞來る人を厭捨され
障子に書かれて
和歌

とをひ壁と是食わねを外れぬとゆきタハ
うとめく念の功とはりてりて、法生と
云ひて、うるふとゆて、こゆじに
西よりわらまくひうづぎて合掌もくす
とあひし、高時葬は會せ、傍の今東収
に属とどりて、うづぎ、鳴く、嗚呼とのゆ
傍法師 織れもとと云ふとゆくめぢら
うと多利との金玉を守護してとゆ

咸とゆふをぬりて ひきすりて歸るを悟
ひまざるに幸ありきは能と歎ひ揚振念化
を通せられ一牛又難うて作り首明禪法下
えは師の今にて傳ひと牛へ大畧はせの
たれに付てのこりりと 一言芳幽世ハ禪
林に竹と寒が如く物にくらぬとこそツケギ
たう便宣の得失と思ひ志ハ乃ハ覺縁にのみ
ひりてあつまとや

○庚子九月十三日前増上湛菴大僧正送化ハナ終焉の
前病るん地もあらずと聞く 今ミシマの貫首ミシマ源菴と
詣ドよりせられぞ非人とぞ思はずと念佛
せんと思ひ一素意りつゝにて年月法身

ゆきもけられどもけく 一牛へ 仰年
一年へ是へ仰り今ハ多く不動に厚きと仰くひ
そゑに十念と唱へ其夜めでたき往生源遍萬
ぬナ之夜の月夜に澄て鎧の音と紫雲にすえ
月ひさきゆく萬風に葦タチとすく神とよじ
うへりし鷲は後世修業の中多正念法の
人と云ふすよもあせ得れ此除に称念第一法
うへて、豈直に道場に到り先上観と歎すく
やされば臨まにて生と食と死と物れば、オレハ破壊
仰情しと申じ妻と顧別かれて母カタと家財に破壊
繰りて放捨不下さるのより境界の不順に因てハ

服と抱て死
或ハ病苦に逼迫して痛と飲
去る革は易治の直路知れバ可憐可哀

○ 忽ハすれ池へ慶長の比良や水谷東の別業にて
东敷山御遠え時寄附くよりせられ其は
池の場所を盡り立初一古都をもとよりゆく
を爲りありと一 波が如容とくづくゆりと
心猶き如き人の生首と云ふれば食も避らず
我よに於て每に人の死難は側にうずの辯一が
山名となりあらひ久或時下部にあわゆるを
うちの山西となり今山主の社比西多也の山
をあれらこそやすこそわれ山居はゆき去れ
とあてくせ一 僧等くわらひ
トロビトヒ仰仰身をうしテノノ多々御酒毒電
もんじく池水底まで下さシト
トモテ信ちゆきだりて不そよ歸人ふくびとく
たゞゆくのである所見くしきて又彼女馬に當
て她取りあわきてあれ内の者ども走りうちて森
廻るがて血に満ずの池へ走りば水漏りゆく
漏りゆきゆもつゝりゆくもとよりてお我あぬれ
留池の邊と廻りて腰一 宮うよや肩水中より
漏りゆきらむかきていため此とのよそもの
ゆくにするそとづくへりゆきゆくをゆくが
ハリヒトモうきゆくい脚のゆくをゆく

ありひれ様の御事ありておとうをかしてこそ
うそば候うれしゆる心のゆきり
りそぞ地がゆくがれ逃げてきよりうの
せ居へじゆゑりんぐわどもくはせうさ
ひあくましめんをほ同き怪異の事うきめ
アリて勸学院のう翁情狀萬葉集才天とお置
波瀬美と鎮せられ然て旦地震て鎧持伊豆縦地
中に沈みてお成揮て得す扇列の脚露將て易
くさりとどどと泥はれて庵とアリ入らず
はずうれとお波瀬氣の町うれじうれ
了翁而又一切経とひ仰了正尊セ今ハ圓の上には
りやくすし絶一也此無乞之念の
法輪一宇とえで阿弥陀紅の像とまつセウ
凡そ称名の地アマニヤマ而呼彼、さいのうの思業もそ
うう乞一念無量功とがる今も報とりて定め
うれうれじ又藏の經綱と聖の像と蓋しげ功德力
に極て今ハ苦果と解脱トゆるにて蓮風香滿て七月
新涼カキコトスモ

三月の後、新すまえをうすにそぞの秋の候

新風

あれども未だ秋とゆきに夏秋さう新の秋の候

書

えうのやうぢらの寫づくとほくせうのうと

尾元

風はうて扇をすくひのぼよきじうせ

柳衣

。宮サ蔵のう松君の御放高廟の御言納誠御の御事
すす九月十九の除^{キハ}もよひて御樟^{シラカバ}せの和
致り

。羽林の死れ所子代とてねのうし君のをへ中
御名は靜よりともそりて秋音^{ヒナギ}もふもは
ひそご無量山より幕——光現^{ヒタチ}鏡譽圓清大婦^{ミツコ}
モ——まくせりる

。もは二年九月十四日御館に歸^{シタチ}は被^{ハサウエ}山能^{ハサウエ}僧

のりもへりへりへりる

。故もうるおと萬葉の表紙^{カバ}にし草木と鳥^{カニ}
御手^{カニ}のうじり高廟御遠忌の法會竹^{カキ}御使
うへて東嶽山^{カマクラ}まくしに春秋候^{カマクラ}本^{カマクラ}よ
はくろ——あくられゆゑおれ氣^{カミ}きことひまれれ
ばく

林立^{ツカタ}麗^{アヤ}孤^ハ逐^{ハシ}風^ハ

勝^ハ日^ハ何^ハ為^ハ昨^ハ仙亭霜葉稀^ハ

もうち來^ハるの内^ハありれ聞^ハのうとくみ秋^ハのけ

月^ハこう

中興の序はあくまでも神の御心を表す

持衣西

玄武門に立つてはるわたくしの御心うれしからぬひ

絶巣

そくはんにかづかれてようふうくじれそー中のよのゆ

紅葉

そのすゝとあしの少くにれつしてひよの葉

寄宿處

○鶴寓冬至

十一月

經日咎不防千里信梅元三五念音寒新香館

便ト御恩勸竹葉強爲一笑歡

○山門探題前大僧正實觀先時の記念にて予天台大师

影像ノ新合ノ役御臨未元量壽と讚ト

偈以書て授けヨリ三十一年九月九日大師講に是頃掛

奉り度讚供願トより

特地巍然睡當年老作家何言隋代化

真足古跡院

九流杳々意厚すり得

佛光羽風子寂雪樟閑梅自別閑春

小道台雲絕壁分天半一調以當面月一輪

落月士卒の雪に残て細雲紫色の纓川ると

西方引接此晚ともいへりしけや

易往而先人の心承りひつけ竹

いよせんゆは其のあまし秋も遠き、萬のうすい波

○仙威通

鍊骨夢年北石間天香乍御玉肌寒

○人木風春の歌より

春はての春柳のひとゑとおもて身をあがえ
花あまく春事つとほてね川よみどりれり

○享保六年辛酉元旦

物育氣和春正融江山鶯綠朝暉紅知韶
光不レカ高下花信一傳万户通

化日由來擊壤歌況魚初躍鳥声和春山
期待同花路行處望新得意夕

此春將歸卿

立冬印蘆の園亭とよき明柳之翁のぞりき。
○周防守貞幹老人君以知倦と号し鳥山林友と云ふ
ゆゑと人々に詠づやれり時

前大僧正實觀

坐と仰そりて、うるゝ音にて、余竹をぬちぬしゆ

全

信阿

微風吹緑桺垂深花落琴牀烟樹深無
銀リ山光怡ス鳥性清音恰夕晚還林
白鳥は荷枝げくをれてこすがせて、留まの山竹

○ 素歌方より歌を

うきゆき歌にてとてと歌やうけう日びの秋れ一ひ

柳衣遠

えうじ葉の黒いとくべばよしとつるさよの山

ゆき夕

凍風門とまのいゆくわじゆゆはむる御のよひ歌

早梅

あすき内に萬はうらりうらりとくに 梅のもうれ

岩石堅久

きのうしすゞく一いの石と金の風にえみえづれ成

玉風吹春冰

解きゆる冰のひまととまもとねがこくよく ほころ風

○ 天滿寺法樂和歌

籠紫（シロ）のめと石室の御移（ヒシキ）ととでざくま 千代の松

○ 享保六年正月十四日 院御會始

法皇御製

子日懐奥

同月九四日 内公宣

御製

うきゆき歌にてとてと歌やうけう日びの秋れ一ひ

○ 東都にて柳のじうた用意ゆりかへきよ
のじくゆきにりくへりくする里に序で柳りくはく
うくらひあともとよくゆきよしすゑ山をみのえ
うはうううふとくえのいちをやま葉のひ

○ うめに今さすれで いうちとぞろしめむと
とくらぬぬは逃川四流うきてあとの浪濱
あくまひ白日二月半千々すあすば待可命う
三月尽のあくまれとくじよりもりの
まとやかびの毛毛細かく毛毛ももの山が眉
東都より或人どうぐらす 嘴息の萬水無深家
六君子湯

右加味 天贝冬 天贝冬 卫味子 熟地黄

此味の外箱根草信に加て用ゆべし野々

○ 駿州巨鼈山清見興國禪寺

同山第一祖開聖禪師 圓法師 潤門祖勅賜宝珠護
國禪師中興勅賜自覺聖智禪師大禪還智
是うる元双の勝地也 容殿は鷺の繪河
演三保の鳴詠ほきせず守前紅梅全盛に開
鷺山衝翠玉梅毫一簇紅雲照海月

紫府清香暖風裏枝南枝北別乾坤

法えどもその毛毛とりかじるの毛毛梅の毛毛
幸せ二月七三日の口号書中後に見出せ 故て記す

○ 卯月朔日

つきとせぬて言のあひとれてえほきまれ毛毛だあれ
我張府のうしとすのひみ規鳴うしとこ

はるひのほと幸ふて丁度のアヒと毛毛りと

。 盛夏初八佛誕之日浴立香冰_{シス}捨一瓣香_シ倡
七蓮隨_{スル}步_{ハシ}ニ毫酒湯_{ハラツ}

嘆

津法界身本元出役
勾波瀧波騰勳三相_{アシマツ}

○家に所宗大纖冠大明神の肖像ハ土佐先起^{シテ}新
圖_{タク}也項目被_{カガメ}初君_{ノミコト}之_ヒ法華經教行_{ハシマツ}得_{タマシ}事
像上に祐_{アシタマ}奉_{スル}新_{ハシマツ}之_ヒ表背_{アシタマ}と_{シテ}大功大德と
謝_{カモリ}り_ム物_{アシタマ}以藤危_{アシタマ}と_{シテ}供養_{ハシマツ}す_ム事_{アシタマ}

。 雨翁明王本地法身の清月旱竟室に游_{ハシマツ}杜稷植
民乃安_{アシタマ}加_{ハシマツ}之_ヒ後_{アシタマ}明_{ハシマツ}ノ_{シテ}照_{アシタマ}

申_ス御_{ハシマツ}事_{アシタマ}此_{ハシマツ}

。 乙酉正月社法樂に春神祇とくぐれ勸導セテ内
玉門_{アシタマ}ナシ_{アシタマ}と_{シテ}あらわす_{アシタマ}アシタマ_{アシタマ}知_{アシタマ}

意信

。 さうをまかしてこまく左のアレアモアシタマ
花の風はアロモテニキアモアシタマヒ_{アシタマ}ヒ
ヒ外れ多_{アシタマ}リ

信阿



